



TITLE:

ベトナム高等教育における構造改革の論理－国家と党による大学への関与－(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

関口, 洋平

CITATION:

関口, 洋平. ベトナム高等教育における構造改革の論理－国家と党による大学への関与－. 京都大学, 2018, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20851>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（教育学）	氏名	関口 洋平
論文題目	ベトナム高等教育における構造改革の論理 －国家と党による大学への関与－		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、ベトナムにおける大学の管理運営体制に着目し、体制移行に伴って多様化した高等教育の構造改革に対する国家及び党の論理を明らかにすることを目的としたものである。大学の管理運営に影響力を及ぼす理念上の要素として国家、市場、大学、そして党の4つを用いた分析枠組みを設定したうえで、国家を構成する教育部と他の行政部門、そして党という3つの主体と大学との関係について検討を行った。</p> <p>第1章では、ベトナム高等教育の変容に関する理論的な視座を得るため、「体制移行論」について理論的に検討したうえで、体制移行国における高等教育の構造変動の典型的事例として、ロシアと中国の改革動向を分析した。そして、体制移行以前には高度な国家的統制のもとに置かれていた大学が体制移行の過程で法人化されて一定程度「自律的な機関」になりつつあり、また体制移行の類型がおおまかに高等教育変容の方向性を規定するという仮説的枠組みを提示した。</p> <p>第2章では、主として南北統一期の北ベトナムを中心に、従来の体制下における高等教育の歴史的展開とその構造について先行研究を批判的に検討しつつ、体制移行以前の大学の管理運営の理念型と国家と党の論理を考察した。その結果、国家社会主義体制下のベトナムにおいては、国家による統制と党による「知識人の領導」のもとで、国家の社会主義建設を遂行するために、大学が教育と研究、そして政治活動を通じて国家及び党に奉仕するという関係にあったことを明らかにした。</p> <p>第3章では、民営大学の多元化と転換の改革に焦点をしぼり、民営大学の類型である民立大学及び私塾大学の管理運営体制を比較的に検討することで、民営大学の管理運営改革における教育部の論理を分析した。その中では、私塾大学が、企業的な特徴が強調されるとともに、党の影響力を減らしよりいっそう市場の原理に委ねられる管理運営体制を備えていることが明らかになった。</p> <p>第4章では、公立大学に焦点をあわせて、従来の体制からの大学のありようの転換と公立大学の管理運営における教育部の論理を検討した。第3章での議論とあわせて、教育部の論理として、大学をより自主的で学術の自由が保障され、またより市場的な原理に基づいたものとし、国家への奉仕を第一義とする従来の大学像から西洋由来の大学モデルへの転換を図っていくことがあると指摘された。</p> <p>第5章では、多数省庁所管方式に着目し、非教育行政部門を中心に中央の各行政部門が所管する公立大学の管理運営に対する論理について考察した。検討の結果、非教育行政部門は当該専門領域の知識や技術を管理するうえで、官僚に専門的知識・技能ないし学位を獲得させる手段として大学を利用する一方、大学は非教育行政部門がもつ相対的に強い財政力の恩恵を受けようと傘下にとどまろうとしており、非教育行政部門による大学への関与を支える論理とは両者のそうした思惑が合致する状況によるものであることを明らかにした。</p>			

第6章では、党による高等教育の方針と党組織による大学の管理運営の論理について検討した。その結果、大学内の党組織は、当該大学の発展方針に関する議決、学内の党建設、政治思想教育の強化、そして大学教員の人事への関与といった役割を果たしており、そうした役割をふまえて、党の論理は従来の体制から一貫した、党による体制維持と正統性の強化であることを明らかにした。

第7章では、体制移行の過程における高等教育の構造改革の実態をまとめるとともに、国家や党との関係における大学の役割について総合的に考察した。

以上の分析から、ベトナム社会にはより高次の学位をもった人物が指導者になるのが望ましいとする通念が存在しており、市場化が進展する中で進められる高等教育の構造改革は、各中央行政部門が専門性に基づいてそれぞれ大学に関与するという体制を残しながらも、一方では大学全体としての知識の伝達と生産における自由化の動きが生じ、他方ではそれに対する党による揺り戻しとして政治性・正統性の拡大という動きを合わせ持ちながら展開してきていることを明らかにし、そのことは、現代のベトナム高等教育において党による社会主義体制を維持しつつ、国家が市場化を進めるという高等教育発展の動態として捉えられると結論づけた。

(論文審査の結果の要旨)

1990 年前後に従来の社会主義国で生じた国家体制の変容は、当該国における高等教育のあり方にも大きな影響を与え、様々な改革が生じてきた。そのような経験をした国は体制移行国と呼ばれ、本論文が対象とするベトナムもその 1 つとして位置づけることができる。すなわち、ベトナムでは 1980 年代半ば以降、政治体制には大きな変化はみられないものの、経済体制に関しては市場経済の導入が進められた。本論文は、このような状況をふまえて、ベトナムにおいて、体制移行の過程で国家と大学との関係はどのように変化し、大学のありようは自治や自主性という概念と関わっていかんに変容しつつあるのか、そして体制移行の過程において国家や共産党はいかなる論理によって大学に関わっているのかを明らかにしようとしたものである。

本論文は、以下の 4 点において顕著な独創性と高い学術的意義が認められる。

第 1 に、ベトナムを体制移行国の 1 つと位置づけて、同じく体制移行国であるロシア（旧ソ連）と中国を比較対照として検討し、比較に基づく分析視点を設定した点がある。外国教育研究がともすれば一国研究にとどまりがちな中で、複数の国を取り上げて体制移行国における高等教育の変容の異同を整理し、ベトナム高等教育の改革状況を分析するための仮説を提示するという手法は野心的である。

第 2 に、大学の管理運営に影響力を及ぼす理念上の要素として、B. クラークのトライアングル・モデルを批判的に援用し、国家、市場、大学に加えて党の 4 つからなる分析の枠組みを設定した点がある。本論文ではこれに加えて、国家をさらに教育行政部門と非教育行政部門とに分けることにより、従来「国家」とひとまとめに論じられてきた部分の内部に異なる論理が存在していることを明らかにしている。

第 3 に、大量のベトナム語文献を丹念に読み込むことで、ベトナム高等教育の発展方針や政策動向をより深い理解のもとで描き出すことに成功している点がある。それが最も顕著に現れているのは、社会主義体制下の教育に対する一面的な理解を越えて、国家や党への奉仕は前提であるものの、社会主義体制下の大学も研究機能を有していたことを明らかにした第 2 章である。

第 4 に、現地での聞き取り調査で得た情報を積極的に活用している点が挙げられる。民営大学の新たな類型である私塾大学の管理運営面での特徴や、大学内における党組織の役割など、文献資料のみでは十分に把握できない点も検討に含めることで、ベトナム高等教育の実情により踏み込んだ分析ができています。

一方、本論文の課題としては、次のような点が指摘される。まず、体制移行や大学の管理運営に関するモデルが必ずしも精緻化されていない。例えば、「国家」を教育行政部門と非教育行政部門に分けたことは本論文の独創的な点であるが、首相や地方政府などどちらにも含まれない要素の位置づけが明確ではない。また、ベトナムにおいて国家が大学に権限を移譲する論理についての説明が十分に説得的とは言えない。さらに、多様化した高等教育の類型に対する社会的評価の側面への言及が弱い。しかしこれらは、本論文の学術的価値を損なうものではなく、むしろ本論文の知見を到達点として今後の発展が期待される点である。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、

平成 30 年 2 月 16 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める（期間未定）。

要旨公表可能日： 年 月 日以降